俺＋お化けは

樹ミケオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺＋お化けは

【Ｎコード】
Ｎ８２８９Ｙ

【作者名】
樹ミケオ

【あらすじ】
死んだ人間と話したり触れたり好かれたりというちょっと不思議な体質をもつ男。一瀬一樹に起こる不幸と奇跡と異常な話。

1話　朝

８月１３日それは暑い夏の日の出来事だった。僕は森の中で子供と出会った。

その子は泣いてたんだ。

「……んぁ？」

「あ、起きた起きた！」

「やっと起きたか。」

女は笑顔で男は呆れたような顔で俺を見下ろしている。

「……蜂谷、今何時？」

「４時間目が終わったところだ。今から昼休みだな。」

この男は蜂谷龍（はちや・りゅう）身長１９０センチの長身で黒髪の短髪、顔はイケメンだ。

「もう早く起きないと昼休み終わってご飯抜きだよ。」
女の方は清水飛鳥（しみず・あすか）小学生のような身長にツインテールの髪を揺らしながらニコニコと俺を見てくる。
辺りを見渡すと席を繋げて弁当を準備するものや、食堂に向かう途中の生徒達が見える。
うわぁ、ホームルーム辺りから記憶がない。……完璧に寝てたな。
「まったく、このくそ暑い中よくあれだけ爆睡できるな。」
「昨日、あんまり寝てないんだよ。……先生達、何か言ってた？」
「いや、たぶん俺の背中で気づいてなかったんだと思う。」
蜂谷は俺の前の席だ。確かにこいつの背中はデカイからな。
「えっと、背中サンキュー。」
「何でだよ。」
蜂谷が苦笑する。
「ところで何だよ寝てないって徹夜でゲームでもしてたのか？」
「いや、夜泣きが酷くてな。」
「夜泣き？……今度は赤ん坊か？」

「あぁ、それは後で話すよ。とりあえず飯食いに行かねぇ？」

寝起きでなんだが腹が減った。

「あはは！いっちゃんは本当にもう。」

「こっちはそのつもりで起こしたんだよ。」

蜂谷は肩を落としながらため息を吐く。俺は恥ずかしさを覚えながら頭をかく。

「悪い。じゃあ、とっとと行くか。」

俺達は食堂に向かうため教室を出た。

2話　昼

俺の通っている清秀学園の食堂は豊富なメニューと異常な安さが売りで多くの学生で賑わっている。メニューの方は５００品とたくさんあるにも関わらず、値段の方は０～５００円以内で買えるという学生にはとてもありがたい食堂なのだ。

「今日は何にするかな？」

「……まだやるのか？ここの食堂で食えるメニューなんてせいぜい５品あるかないかだろ？」

「いっちゃんも懲りないね。」

ただし、ここのメニューは殆どがハズレメニューでとてつもなく不味い！食堂のおばちゃんが生徒の栄養面に気を使って作ってくれているのだが味のほうがまずい！もっと味のほうも考慮してほしかった。

だが、それでもメニューのなかには美味い料理はあるらしく数少ない冒険者達の手ににより、現在５品のメニューが発見されている。……ちなみに、それを見つけた冒険者たちは伝説として尊敬し崇められている。

「当たり前だろ？俺も冒険者（食）の端くれ、この中から極上のメニューを探し出して見せるぜ！」

寝起きのせいかテンションが高い俺。

「……ほどほどにしとけよ？おばちゃん『イカの意外なファンタジスタ』一つ！」

そのテンションに呆れる蜂谷。

「私は今日はダイエット中だからいいや。」

聞いてなかったようにスルーする清水。

……二人ともノリが悪い。

因みに安全な5品というのは今、蜂谷が選んだ『イカの意外なファンタジスタ（イカの炒め）』

とほかに

『ラブ麻婆ディスティニー（麻婆豆腐）』

『レッドマウンテン（チキンライス大盛り）』

『肉と魚のケミストリー（肉と魚の煮込み）』

『ダイエットゼロ（カロリー高めの肉炒め）』だけだ。

今、食堂にいる生徒はほぼ全員このメニューを頼んでいる。定番のカレーなんかはとてもじゃないが食えたもんじゃない（体験済み）。

「えーと、今日は……『ビタミン海鮮丼』ってのにしてみるか？おばちゃん！『ビタミン海鮮丼』一つ！」

俺もおばちゃんにメニューを注文する。

「あいよ！」

五分もしないうちに俺と蜂谷の前に二つの料理が運ばれてきた。あまりの調理の速さに驚きつつ、それをもって食堂の空いてる席に座る。

「今日のは当たりだといいな。」

「いや、見た感じハズレだろ。」

「だね。」

二人とも失礼だな。見た目で判断するなんて偏見の極みだ！

俺の丼のなかにはミカンやブドウなんかの果物がご飯の上に乗りさらに大量のアンがかかっている。

……うん。見た目大事。

きっとイクラやウニと間違えたんだろうと信じたくなる。

……まぁ、食べてみないと始まらない、俺は覚悟を決めてそれを口に運んだ。

「……っぐぅぅ！」

不味い！口の中に胃が逆流したような気持ち悪さだ。

それでも、不快感をこらえて水で何とか流し込む。

「ハァ…ハァ…」

息も絶え絶えに肩を上下させる。

「大丈夫か、」

「く、口の中が酸っぱさで大変なことになってる。」

めちゃくちゃ不味い！殆ど酸味しか感じないし、ほっぺの裏側がピリピリする。

「自業自得だ。残すなよ？料理を残したら罰金３０００円だぞ。」

そうだった、うちの食堂は安いが注文したメニューを食べきれなかった場合３０００円の罰金がしかれている、たぶん残す奴が大量にいたからだろう。

気持ちは全然解るが。

俺は呼吸を整え、冷静に丼の中を見た。

丼の大きさを見れば３５回……いや、大きめに食べれば２５回で食いきれる計算だ。一口であのダメージだ、２５回も口に入れてて胃がもつだろうか？

……。

「……蜂谷、半分食わない？」

こういう時の友達だ！きっと助けてくれるはずだ。

「だから言ったろ？悪いが俺はこれだけでお腹が一杯だ。」

蜂谷はため息をつきながら言ってくる。……確かにその通りだ！だが、ここで諦めてたまるか！

「俺がお前の半分食うから俺の半分を食ってくれ！」

「いや、無茶苦茶だろ。どんな原理だよ？」

「……等価交換。」

めちゃくちゃ白い目で見られた。

うん、確かに自分でもこれは無茶苦茶だと思う。

「……利益が無さすぎる、頑張れ。」

蜂谷は呆れたように俺を見た後また自分の皿に視線を戻し黙々と食い続ける。クソッ！旨そうに食いやがって、

無理だと判ってるが清水の方を見てみる、するとそれに気付いた清水が手を大きく交差させてバッテンを作っている。

まだ何も言ってないのに……いいさ！いいさ！俺が本気になればこれくらいへっちゃらだ！

俺はかなりやけくそ気味に勢いよく丼を傾けて口の中に放り込む。

ここから5分間は説明が大変困難なので中略致します。

「……食った！」

俺は完食した。

フフ。俺はやればできるんだ！

「……よく食ったな？」

蜂谷が驚いた顔をしている。

「フッ。意外と楽だったよ。３口目辺りから味がしなくなったし、半分くらいからは激痛にも慣れてきたからな。」

「いやいや、なんで食事でダメージ受けんだよ？」

俺も知らなかったよ。酸っぱさが体に痛みを走らせるものだったなんて。きっと未だ解明されていない食の神秘だろう。

「俺も知らん。おばちゃんに聞いてくれ。」

「まぁ、いいか。……それよりそろそろ話してくれよ。また憑いてんだろ？」

蜂谷が食事から目を離し真面目な顔でこちらを睨む。

「……まぁな、」

そう、俺には他の人とは違う少し変わった体質の持ち主なのだ。俺は自分の頭を指差し聞く。

「今、俺の頭の上に乗ってんだけど。……見える？」

二人は俺の頭の上を睨み付けるが暫くして、肩を落としながらため息を吐く。

「駄目だ。やはり見えない。」

「全然見えないねー。」

まぁ、そうだよな。ここにいる全員が見えていないんだから。

実は俺には幽霊が見えるという特殊な体質を持っているんだ。他にも話したり触れたりできる、そのせいなのか昔からか幽霊に憑かれやすいようになってしまった。

お陰で俺の人生は死と隣り合わせでかなり苦労した。しかも、こいつらは未練？というかお願いを聞いて満足させてやらないと俺から離れやがらないんだ。（所謂成仏ってやつだ）。
「昨日、散歩してたら突然憑かれてな、それから一晩中泣いていやがった。……今は大人しく寝てるんだけど。」
俺はみんなには見えないガキの頬をつつく。
「あぁ、だから寝てないって言ってたのか。」
しかも質が悪いことに。ただの夜泣きがラップ現象を起こし、部屋の物を壊すし。泣き止ませようにも金縛りで身動きひとつ取れずで、昨日は一睡もしていない。
お陰で心身ともに疲れてしまった。
「そうなんだよ。お陰で部屋の物は壊れるし、一香にも怒られるしで踏んだり蹴ったりだ。」
「……ご愁傷様。なら、今日中にその子の未練を叶えて、成仏させてやれ。」
「……あーそれなんだが、ひとつ問題があってな。」
「「……？」」
二人は首を傾げる。

「言葉がわからないんだ。」

「「……」」

二人に白い目で見られた。

イヤだってしょうがないじゃん！相手は赤ちゃんだもん！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8289y/

俺＋お化けは

2011年12月11日22時59分発行